

窓辺からその向こうへ

東北芸術工科大学 芸術学部文芸学科 教授
川西 蘭

福島から山形へと新幹線が進むにつれて、緑が濃くなる。窓ガラスに鼻先が触れるほど近づけて、車窓からの景色を眺める。深い山、山肌にジグザグの線を刻む道、渓谷、澄んだ水の流れ……。眺めているうちに息苦しくなってくる。知らず知らず息を止めていたことに気づいて、大きく息を吐き出す。

山形はこれまで馴染みのない土地だった。山形だけでなく東北地方にあまり縁がなかった。何度か取材には来たが、長くて三日程度の滞在、短ければ日帰りする。名所旧跡（最近では世界遺産）を中心に忙しく動き回るから情緒を味わう余裕がない。

それでも、最初に東北の地に足を踏み入れた時には、森の濃さに圧倒された。普段見慣れている山とは樹木の密度が違う。山が奥深い。奥深さは山だけでなく、すべての自然、そして、自然と不可分な文化にも共通しているのだろう。機会があったら、東北をじっくりと歩いてみたい。その時抱いた思いはその後ずっと胸の奥にあった。

東北芸術工科大学の文芸学科に誘われた時、思い浮かんだのはこのことだった。二十年の時を経てようやくその機会が訪れたのだ。

山形の地を訪れるようになって約半年。まだじっくりと東北の地、山形の地を歩く機会には恵まれていない。しかし、新幹線の車窓と山形市の高台にある大学からの眺望で、今のところは十分に間に合っている。

山の緑、麓に広がる田畑や果樹園も郷愁とともに心を和ませるが、視線を上に向けた時の空がまた素晴らしい。朝から夜、晴れから雨、冬から春、時間により、天候により、季節により、これほど

までにダイナミックに様相を変える空を私は見たことがない。

空全体が燃え上がるような夕陽を見たのは山形が初めてだ。朝の空は、まさに世界が更新されたかのような清々しさに満ちている。大学の校舎から宿舎へと歩きながら眺める夕陽や夜空は疲れを癒し、宿舎から校舎へと向かう途中に見る朝の空や山々は新しい生気を体に吹き込んでくれる。

劇的に変化する空の下で豊かな自然に囲まれていると、新しい物語が体の奥で蠢き始めるのを感じる。書きたいという欲求が抑えられないほど強くなる。物書きとしての本能が目覚めるのだ。

自然と文化は不可分だ、と先に書いた。豊かな自然は生命を根源から刺激し活性化させる。そのパワーの強大さには畏怖するしかない。自然からの恵みを受けて、人間は活性化し、畏怖を込めて物語を紡ぎ出す。自然は語るべき存在であり、自然を語るには物語によるしかないからだ。そのようにして、自然は物語を生み出し、文化を育む。

山形、そして、東北の自然が奥深いように、その文化にも奥深さがあるはずだ。私はまだその表面すら知らないでいる。車窓から、あるいは、大学から眺めているだけでなく、自然の中へと足を踏み入れ、文化を身体を通して学んでいきたいと思っている。

川西 蘭 (かわにし・らん)

広島県生まれ。早稲田大学在学中に小説家デビュー。以降、『パイレーツによるしく』『赤い革装の手帳』『光る汗』『夏の少年』など著書多数。近著に、自転車競技を題材としたスポーツ青春小説『セカンドウィンド』、『あねチャリ』や仏教関係のエッセイ『坊主のぼやき』などがある。